やっているわけです。そういう意味では、学校の中で、ほかのこの目の前では自分だけ占有しないということがある程度ブレーキになるんですけれども、それを今度は家にもって帰ったときに、まさしくペット状態になるんです。だから、１０週間に１回自分の家に来たときに、ほかのこの目を気にしないでたっぷりさわれるということになるわけです。そうすると、今まで学級でさわっていたこととを違うことを、彼らは思う存分やるし、それから発見もたくさんあるということになると思います。その辺の変化は保護者の手紙からどんどんわかってくるんです。だから、学校ではある程度他の子の目を気にしながら、等距離でつきあおうとするけれども、自分のところに帰ってきたら、１００％自分のものということ、２泊３日だけは、自分のペットという意識は彼らはもっているような気がしますけれどもね。

それくらいしか感じる部分がないんですが、よろしいですか？

＜鳩貝＞

今のお話は、教室で飼うことと自分の家にもって帰るということの子どもたちのその場その場での対応の仕方、友だちとの人間関係、生き物とのかかわり、それをきちんと見据えながらやっているということかと思います。

横山さんの質問の趣旨は、今の答えでおわかりになりましたか？

＜横山＞

それは、ハムスターやモルモットだからできているということですか？つまり、イヌとの関係は全く違うと思うんですよね。それはちゃんと教えるっていうことですか？

＜鳩貝＞

イヌとの関係はまたちょっと違うと思うんですが、そのへんはどうしましょうか。

＜森田＞

そのことは、私の学級に限定すれば、何も教えていません。彼らは勝手に判断しているということです。実際にイヌを飼っている子もいますし、だから、そういうところで彼らはつきあい方を全く同じにしているか私も聞いていないので、推測でしかないんですけれども、それはたぶん違えていると思います。

それは、やはり家でイヌを座敷で飼っていることがありますよね。彼らはモルモットをもっていくと、モルモットの周りに寄っていくわけです。モルモットはイヌが来るとおびえるので、彼らは、イヌを別の部屋に押し込んだり、つまり、普段かわいがっているイヌの方を我慢させるわけです。だから、彼らの順序からすれば、みんなで飼っているモルモットが第一優先で、クーラーの利くいちばんいい部屋に置かれるわけです。それで、たった２泊３日だけイヌを我慢させて蒸し暑い部屋に押し込んでしまうということを彼らはやっているようです。

＜鳩貝＞

その辺のことについて、中川先生いかがですか？

＜中川＞

ネコを拾った話がありましたが、あるお子さんが拾ったネコを飼いだしたんです。その弟の言葉なんですが、「お姉ちゃんネコが来たらモルモットの面倒見ないんだよ」っていうんです。そして、その弟が一生懸命面倒見ているわけです。

そういう事例は確かにあるかもしれませんけれども、やっぱりクラスのモルモットというのをみんなが認識して、大事に扱っていると思います。

＜鳩貝＞

ではそのことについてちょっと唐木先生お願いします。

＜唐木＞

今、イヌのお話ですが、イヌはモルモットのようには飼えません。ご存じのように、イヌはボスがいてあとはそれに従う動物ですから、人間をボスと思っているとそれが次々回っていったらイヌはノイローゼになります。ですから、ボスが１匹いて、イヌはそのボスに１００％従うことによって、安堵感を得ているのです。そういう動物ですから、こういう集団飼育に合う動物と合わない動物がいます。

＜鳩貝＞

その辺は、学校飼育動物を考えるときに特に重要な点かもしれません。先ほど桑原先生がおっしゃいましたように、どういう動物種を選ぶのかということが、大きくかかわってくることかと思います。

続いてのご意見をお願いします。

＜最上＞

青森県八戸市の最上と申します。

先ほど森田先生があげられた課題にもあったんですけれども、アレルギーの問題について、パネラーの先生方にご質問したいと思います。

われわれ八戸でも４年前からふれあい指導ということで、各学校を回って、ふれあい指導をやっているんですが、その過程の中で、幼稚園から小学校にはいるときの１日入学のお子さんで、強いぜんそくを引き起こしまして、救急車で運ばれたという事例があったんです。実際そのときにモルモットを教室で飼っている事例だったんですが、その時点で、モルモットをさわったとかなにもなく、教室の中にモルモットがいたというだけで、喘息の原因が、モルモットの毛によるものだろうということで、校医さんがそのモルモットのアレルギーだろうとおっしゃって、学校からは一切動物を排除してくれと、そういった事例がありました。それで、学校側は、校医さんの意見をそのまま尊重して、そのまま学校から動物がいなくなったという事例があったんですけれども、そのときにわれわれ獣医師サイドとしてどのような対応をとるべきなのか、意見としてどのようなことを話をしていっていいものなのか、その辺のところの先生方のお考えをお教えいただければと思います。＜唐木＞

それはかなり理不尽な話で、校医さんのその感覚、感じ方でその問題を処理したということだろうと思います。アレルゲンはテストすればすぐにわかるわけです。本当にモルモットが原因だったのかどうか、それを確認してもらうというのが、まず大事なことだろうと思います。

＜中川＞

森田先生のクラスでもやはりそういう親御さんの心配があったときに、それはきちんと子どもさんが親御さんに説明したら、調べてくれました。だから、獣医師のやったことは、唐木先生がおっしゃったように、科学的な見知から対応したらどうですかということです。そうしないと、他の子どもが恨んだりしてしまうということもあるわけです。

それから、そういった上でやはりその子が反応するようでしたら、そのときはみんなで考えればいいということだと思います。

たった１回来て、緊張感からか何からか原因がわからないまま起こした喘息なのに、すべて何も文句が言えない動物に押しつけてしまうという風潮が結構ありますので、獣医師が頑張っていただけたらと思います。

＜森田＞

補足で、私の学級も基本的には希望制なんです。全員に強制すると今みたいな問題があったりすると困りますので、一応希望をとります。そのときに「やらない」という子はいないですね。でも、心配事を書く欄があって、それを見ると、アレルギーのことも出てきます。そのときには、先ほど言ったように、ゴム手袋、長袖で世話をさせるようにします。だから、直接ふれあわないようにします。それでも、ちょっとかゆくなった場合には多少距離をようにします。

あるお母さんは、「うちの子はアレルギーなのでさわらせないでください」と言ったんですが、ではわかりましたと、手袋をして長袖でやりなさい、と言ったんですが、１週間もしたら子どもですから、もう手袋を忘れて、素手で世話してるんです。私の方はあとで気づいて大丈夫か心配したんですが、全く大丈夫でした。そんなもんだと思います。だから以外と保護者の方が、ものすごく心配が先にあるようです。ただ、最近の子どもたちにはそばアレルギーとか卵アレルギーとか魚卵アレルギーとか、われわれの想像もしていないようなことがあるので、特に今１年生担任なので、子どもたちに判断をしろと言っても無理なんですよね。ですから、ある意味では、事前にアンケートを採って、こちらでそういう情報を知っておいて、なおかつ、これは調べればわかりますから、念のために医者にいってアレルギーの診断をしてくださいといいます。そうすると、アレルギーだって言った子の中には、モルモットの毛は大丈夫だけれど、ウサギやネコの毛にアレルギーを起こす子がいるわけです。そういうことがわかっていれば、親も安心するし、こちらも安心できると思います。やはり、検査をしてもらうというのが、いちばんいいんじゃないでしょうか。

＜鳩貝＞

動物飼育の場合には、今そこが非常に問題になっています。１人の子がそのアレルギーをもっているために、結局全体で飼えなくなってしまうこととか、鳥インフルエンザに関しましても、結局学校から鳥の仲間がいなくなってしまうような状況が現実に出てきています。不安が先だったためのいろいろな行動が起こってきている。それについては、今唐木先生がおっしゃいましたように、科学的な見方、先ほどの発表にもございましたが、そういう知識をきちんとわれわれ自信も身につけていかないと、そういう風潮に流されてしまうことになります。先生方もやはり不安だからそれを信じてしまう。ということなのかと思います。そういう意味でも獣医師会のみなさんや、医師のみなさんとも連携しながら、この研究会そのものもそういうことを勉強して、各学校の先生方にも不

安な状況がないように、いろいろな広報活動をしていく必要があるのではないかと考えております。

そのほかにいかがでしょうか。

＜田中＞

学芸大附属世田谷小学校の田中と申します。よろしくお願いいたします。

先ほどから唐木先生のお話をたいへん興味深くお話をうかがっておりました。先ほどイヌの件につきましても、学校でイヌを飼えというお話だったのかちょっとよくわからなかったんですが、私どもはかつて、イヌを飼いまして、子どもが怪我をするというようなそういう状況も起こって、たいへん危ない目にあったこともあります。そういう意味で、集団で飼うときにどういう動物が適切かというような、今回の桑原先生のご提案なども非常に大切に受け止めなければいけないと思いました。

桑原先生のお話の中で、期限をつけてというようなことをおっしゃっていたかと思うんですが、その辺のところをもう少し教えていただけると嬉しいと思います。

動物を飼うというときに、教員がどういう気持ちで飼っているのかということを考えると、非常に様々だと思います。自分が飼いたくて仕方なくて子どもにかこつけて飼ってしまうのか、それとも子ども自身の発達段階に応じて、とてもこれは大事だからということで飼うのか、ということでも全然違うと思います。また、そのときの対応によってはやり、子どもにとっての必要性を感じた場合に、それなりに親などに説明などをして、了解を取って飼育をしていく方もいるだろうし、とにかく、周りのものを巻き込んで事実をつくってしまうというやり方をして、あとでおかしくなるという場合もありますので、そういうところを考えていかなければいけないと思います。

期限ということも非常に興味があるので、教えていただければと思います。

＜桑原＞

期限ということで、群馬県獣医師会と学校が６年間の連携をとっている中で、やはりいちばんの問題は、赴任先に必ず動物がいるということです。私の意志に反しても、そうでなくても、動物はいるんだということです。それで、飼育舎の構造とか飼育頭数に制限がないために、自分の首を自分で絞めているという状況です。そんな状況なので、果たして、学校がずっと同じ動物を飼う必要があるのかということも考えてもいいんだと思うわけです。そういう一連の流れの中で、思いやりの形成の時期は、８歳までとか１０歳までとかいわれますが、生活科で、１，２年の期間の中で、たとえば１年半とか２年の終了までとかいうような、学校計画、生活科の指導案に基づいて飼うということ。それで、２年の３月の終了時にその飼っていたクラスのウサギは、たとえばクラスの中で相談をして、持ち帰るとか、森田先生の事例のようにして、持ち帰るのか、また１年生に戻すのか、６年生まで飼うのか、室内で飼った動物は、６年経ったら一緒に卒業させたらどうですか？というような提案をしています。ですから、室内飼育に限って、愛情を注いだ動物は、年限を切って、卒業したときに置いて帰ってしまうのではなくて、一緒に卒業させましょうよ。というような、具体的な思い入れが入る動物なので、外の動物と全然違うと思うんですね。ですから、室内飼育の動物にチャレンジした場合には、必ず年限を切って、そのあとはもって帰るとか、６年まで飼って一緒に卒業するんだというような、いろいろな具体例を考えていかないと、子どもの優しい気持ちとか、子どもが純粋に動物のことを思っている気持ちを見過ごしてしまうケースが結構あるかと思います。ここは、先生の意見と子どもの意見がうんと違うところです。だから、その辺は十分生活科で室内飼育を始める前には、アンケート調査や、動物の環境とか、どんな動物を飼ったらいいか、１年生からスタートする場合は半年間かけて、保護者とか、学校全体の教員とかで、検討しながら、年限まで決めた飼育計画を立てた方が、先生方もいいし、すべてにいい循環になるのではないかと考えています。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。中川先生。

＜中川＞

今のことで、補足させていただきます。今学校で飼われているのは、飼育委員会が飼育舎を維持するというやり方がありますけれども、愛情を基本にしたときというのは、ちょうど３０ページに提言をしましたけれど、これは、各地の学校やらいろいろな学校のやり方を見て、森田先生たちと相談し、一つの形にまとめたものです。

学校で飼うときには、生活科の中で身近に飼うということを必ずしたらどうかということです。そのときの動物は、ウサギより小さいもので、１，２年生は飼育舎がまだ管理できないから、教室の内外で飼う、もっと身近で飼う。そして、３，４年生になれば、飼育舎を管理できる能力がありますから、飼育舎で飼う。３，４年生の飼育は別に年限を切る必要はないので、学校のためにずっと維持して、保谷第二小みたいな飼育法方がいいと思います。こういうやり方をすれば、５，６年生

はこのことを基礎にいろいろに発展していくということで、直接には飼育にかかわらない。

それと、全く別のことですが、森田先生のように、総合的な学習の時間に位置づけていらっしゃいますけど、いわゆるクラスのペットとして、飼っている場合もこのごろだんだん増えて、そのクラスのペットの場合は、森田先生の例と同じように、一緒に卒業する。または期限を切る。そういうのがいいと思います。

だから、いろいろなやり方がありますけれども、子どもと動物がどのようにかかわれるかという、感情を見て飼える動物と心をつながらせるということをやっていただけたらと思います。かわいがるというところから、いろいろなところへ発展しますので、かわいがれる状況をつくってあげてほしいと思います。

＜島田＞

西東京市の島田と申します。

長いことぐ犯少年とかかわってきたことから、質問というかお願いなんですが、今、みなさんのお話ですと、たぶん小学生とかが対象だと思います。最近テレビで目にした方もいらっしゃるかと思いますが、再犯率０の少年院というので、アメリカで、日本では保健所に預けられてしまうようなイヌを少年院の子どもたちに育てさせたところ、その少年院の子どもたちは、少年院を出てからの再犯率が０であったということがあります。いまだかつてその０というのは破られていないということです。

今、青少年犯罪が非常に問題になっております。小さいときにやっておかなければならないということはもちろんなんですが、青少年がいることもお忘れいただきませんように、是非、獣医師会の先生方、また、小中学校の先生方も動物を飼うことを通して優しい心を育てて、青少年犯罪を少なくしていきたいと思いますので、その辺のご協力を是非お願いしたいと思います。

＜鳩貝＞

小学校だけではなく、中学校高校でもそういうことを考えていく必要もあるのではないかというお話でした。

＜石田＞

多摩動物園の石田と申します。

学校の話を中心にされているんですけれども、今、獣医師さんにかかっている動物の数というのは、十数年、二十数年ほとんど変わっていないと思います。ところが最近見ていてもわかると思うんですが、町中で子どもたちがイヌを散歩するとか、そういう場面を見ることがなくなりました。つまり、動物を家庭で飼うということのスタンスが、著しく大人化しているわけです。では、なぜ大人化しているかということですけれども、大人だとすると、人間と動物の関係と、人間と人間との関係が飼う上でも重視されていることになります。

そういう中で、そのような実際的なメリットというものが大人の中にはあるわけですから、そういうことを適用して、たとえば生臭い話になってしまうかもしれませんが、学校で動物を飼うということによって、学校運営がうまくいくとか、家庭の環境がよくなるとか、そういうことを積極的にどこかで事例を出して、そういうことをてこに活動していく必要があるのではないかと思います。そのことによって、特にいちばんいいのは、先生方の精神的な負担が下がっていくというケースが出てくることがいちばんいいと思うんです。その一つが今日の、獣医師さんが学校を支援するということだと思うので、何とか教員が学校で動物を飼うことによって、たいへんなところはたくさんあるけれども、うまくいくとすごく楽になるんだということを、うまく表現できないかという感じがしますが、いかがなものでしょうか？

＜唐木＞

動物飼育に限らず、人間の行動はすべてそうなんですが、コストベネフィットの計算なんですよね。ですから、学校飼育動物はコストがかかる、コストというのは、手間がかかってお金がかかって、アレルギー対策で．．．という面倒くさいことは山ほどあります。その割にベネフィットがはっきりしない。そこはおっしゃるとおりです。

それから、昔は子どもが家庭で動物を飼いたいといっても、残飯を与えるくらいでコストはあまりかからなかったわけです。今はアパート暮らしで飼うのがたいへんになり、コストがかかるようになった。そうするとそこでもやはり、ベネフィットがあるのかどうか。この研究会は、先ほどの講演の最後でも申し上げましたとおり、ベネフィットが何なのかという、先生方の教訓をなるべくたくさん集めて、それを世の中にアピールしたいということで、今ご提案のとおりのことを、この会でやるべきなのではないかと思います。

＜森田＞

今のようなお話は、いい事例はいくつかあるんです。たとえば、私は１年生を担任していて５月くらいから飼い始めて、そろそろ３か月くらいになるんですけれども、全くほ乳類をさわったことがなかった母親がいたんですが、私が担任して子どもが家に持って帰って、子どもと一緒にさわりましたというんですね。そして、改めてほ乳類のおもしろさがわかりました。という手紙を長々と